待つことの快楽

電気を使わないことで、待つことに快楽が生まれた。私たちは電気を使うことで時間をコントロールしてきた。照明によって明るい時間を延ばしたり、電子レンジによって一瞬で物を温められるようにした。電気を使わなくなると、私たちは物本来の時間を受け入れ、忘れかけていた「待つことの豊かさ」を思い出す。ゆっくりと部屋が暖まるのを待つ感覚、誰かの帰りを待つワクワク、私たちは無意識のうちに待つことの豊かさを排除してきたのかも知れない。待つことの快楽によって人と生活の関わり方を見つめ直す。

1 疎遠になった「待つ」こと

通勤電車ではスマホを手に取り、時差の無い連絡手段により人を待つことは減った。

ドライヤーや乾燥機は髪や服をすぐに乾かす。また、ボタンひとつで部屋が明るくなり、快適な温熱環境も手に入る。

電気を使うことで生活は効率化され無駄が無くなった。それと同時に私たちは待つことを避けるようになり、疎遠になった。

2 「待つ」ことの快楽

電気を使わない家では、私たちは再び待つ必要が出てくる。そして私たちは待つことを思い出し、その中に快楽を見出す。

電気で半ば強制的に操作してきた時間を解きほぐし、ゆったりと流れる本来の時間に身を委ねる。

囲炉裏の前で体をじっくり温め家族と談笑する時間や、優しく包み込まれるようなそよ風を待つ時間。それは、電気による便利さに埋もれて忘れ去られていた待つことの快楽なのである。

3 「住む」ことと「待つ」こと

自然を構成している「人地火空風水」と「待つ」ことから「住む」ことを考える。

自然や他人といった自分以外のものはコントロールすることができない。

しかし、支配できないものを支配しないことで見えてくる快楽が存在する。

そんな快楽をそっと掬い取るような住まいをつくる。

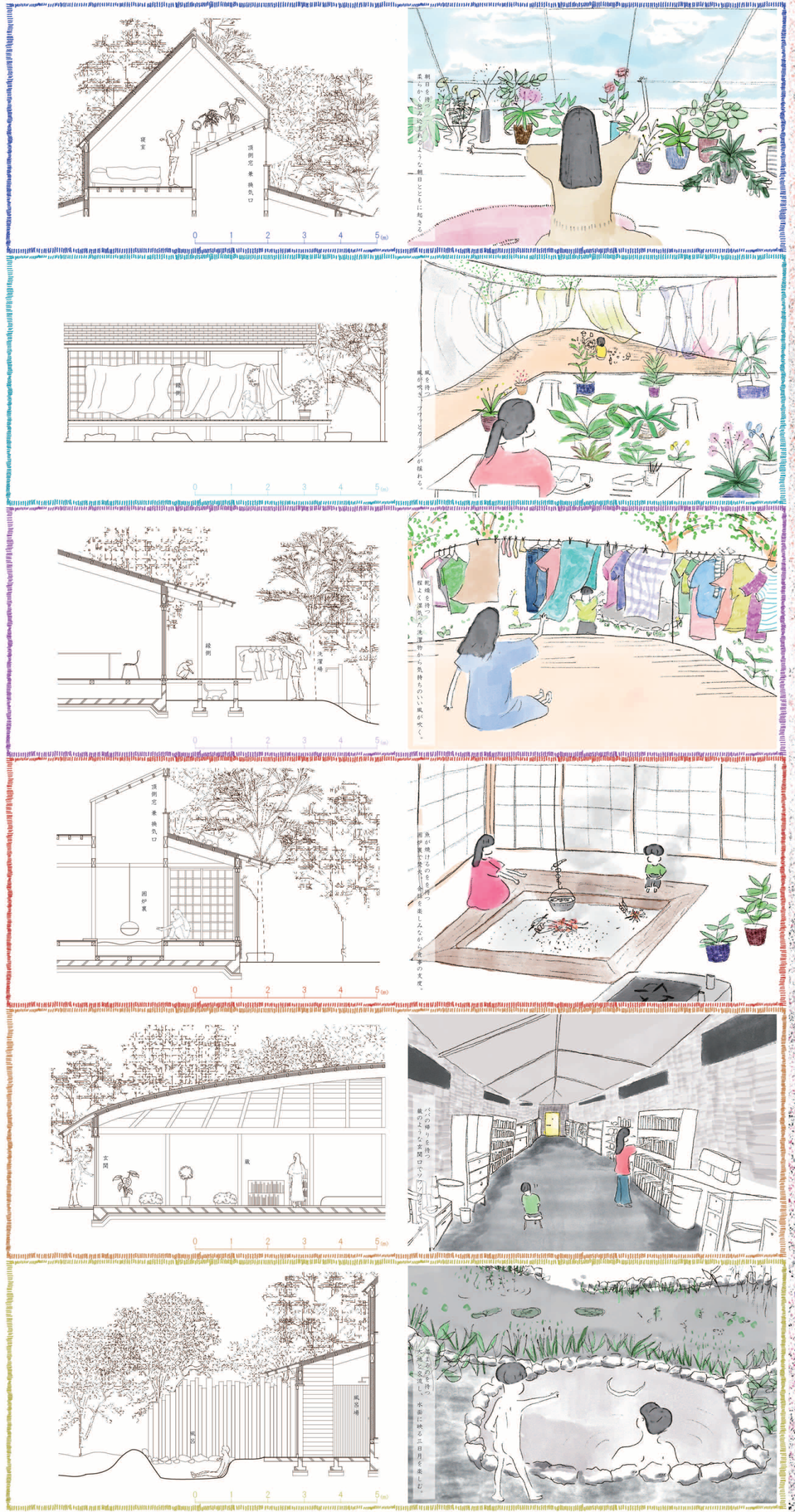
4 待つ快楽の家

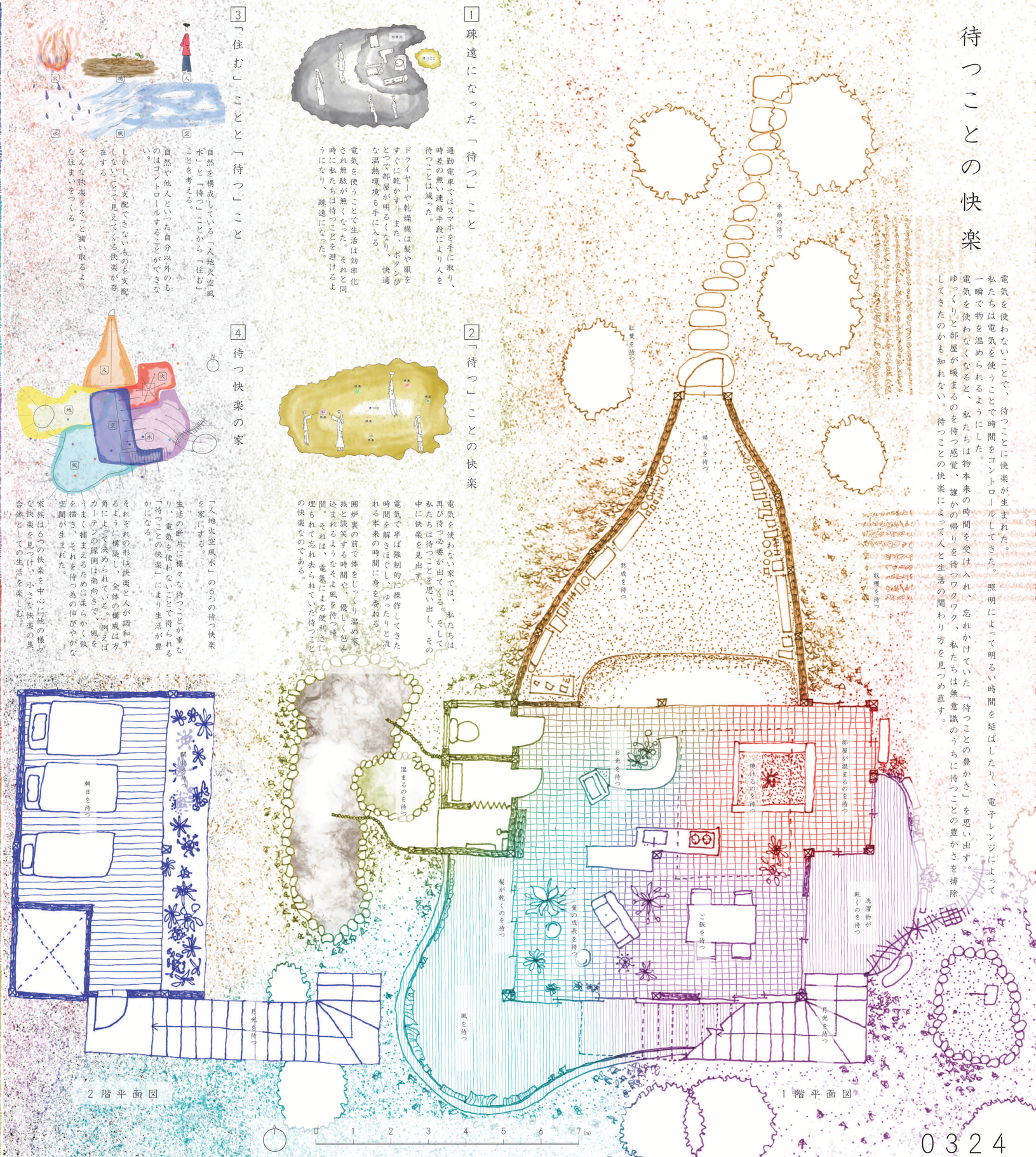
「人地火空風水」の6つの待つ快楽を家にする。

生活の断片に様々な待つことが重なり、電気を使わないことで得られる「待つことの快楽」により生活が豊かになる。

それぞれの形は快楽と人が調和するように構築し、全体の構成は方角によって決められている。例えばカーテンの縁側は南向きで、風をうまく捕まえるために柔らかく弧を描き、それを待つ為の伸びやかな空間が生まれた。

家族はこの6つの快楽を中心に他の様々な快楽を見つけ、小さな快楽の集合体としての生活を楽しむ。





2 階平面図

1 階平面図